

フェドシューク  
『古典作家の難解なところ  
あるいは  
19世紀ロシアの生活百科』(その5)

Ф. А. Федосюк  
Что непонятно у классиков  
или  
Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一  
岡 部 由 佳  
小 林 慎 吾  
村 松 多恵子

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)、63号(2005年10月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章に続いて、今回は4章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。3章は4節からなるが、岡部が1節、小林が2～3節、村松が4節を分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は[ ]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

## 第4章 金銭と有価証券

### Деньги и ценные бумаги

#### 1 節

ポルウーシカ( $\frac{1}{4}$  コペイカ銅貨)からカテリンカ(100ルーブリ札)まで

От полушки до катеринки

いったいロシア古典文学の大作と曲がりなりにも呼ばれるような作品において、金銭単位について、あるいは登場人物同士の貸借関係や財政問題について触れられていないようなものがあるだろうか？ この金銭にかかわる語彙層こそ、現代の読者にとってはとりわけ理解困難な代物である。金銭および金融のシステムの多くがすっかり変わってしまったからである。ロシア古典文学作品中にはときに、余りの分かり難さに、ロシア語ではないのではないかと思われるような対話やフレーズが現れる。たとえば、ゴーゴリの『死せる魂』では、賄賂を巡る次のような会話に出会う――

「『まさか何もつかませないってわけじゃないさ。私にだってチェトヴェルターク[銀貨=25 コペイカ]の一枚や二枚の用意はあるさ』——『いや、チェトヴェルタークじゃなく、ベーレニカヤ[白札=25 ルーブリ]だね……書記連中の懐にはチェトヴェルタークずつ入って、その残りが上役に回るという寸法なのさ……』——『昔はみんなが少なくともどうしたらいいのかだけは心得ていて、事務主任にクラスナヤ[赤札=10 ルーブリ]を一枚つけ届けさえすれば、それで万事丸く収まっていたものだが、今日日はベーレニカヤを一枚ずつも貢がせた挙句、けりをつけるのに1週間ももたもたしていやがる……』 «Почему ж не дать? я готов четвертак, другой». — «Нет, не четвертак, а по белянкой... писарям и достанется по четвертаку, а остальные пойдут к начальству» ...  
Прежде было знаешь по крайней мере, что делать: принес правителю дел красную, да и дело в шляпе, а теперь по белянкой, да еще неделю

провозишься...」[1部11章]。

あるいはドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』では、次のような弁護士  
士の台詞に出会う――

「……殺害した後に店へ戻った店員は警察に、盗難被害総額のみならず、その  
総額の中身までを正確に、つまりラドゥジナヤ[虹札=100ルーブリ]、シー  
ニャヤ[青札=5ルーブリ]、クラスナヤ[赤札=10ルーブリ]がそれぞれ何枚で、  
ゾロトói[金貨=10ルーブリ]が何枚だったのかまで正確に届け出たのです ...  
воротившийся после убийства в лавку приказчик сообщил полиции не только  
об украденной сумме, но и из каких именно денег она состояла, то есть  
сколько было кредиток радужных, сколько синих, сколько красных, сколько  
золотых монет и каких именно」[4部12編11章「金はなかった。盗みもなかった」]。

現代の読者にとってこうしたフレーズは、ほとんど代数の方程式と変わらない  
響を持っている。

まずは初歩から、すなわち小から大へという順で金銭単位の公式的、および  
非公式的な呼称を説明するところから始めよう。

〈**ポルウーシカ полушка**〉はもともと小額の硬貨、「 $\frac{1}{4}$  コペイカ銅貨」のこ  
とである。これは1917年まで存在した。その後1925-1928年にも流通したが、  
そのときは「 $\frac{1}{2}$  コペイカ」であった。「ポルウーシカ」という語が使われたの  
は大抵転義においてであり、ほとんど無に近いほどの取るに足りない量を意味  
した。プウシキンの『コロームナの家』では、髭剃りの現場を見つけた女装  
の料理女マヴルウーシカが、「給金はポルウーシカも受け取らぬまま、出て  
行ってしまった Ушла, не взяв в уплату ни полушки」[38連4行目]。ここで一  
つ諺を思い出しておこう――「海の向こうでは牝の子牛が1ポルウーシカで買  
えるが、それをここまで運ぶとなると1ルーブリかかる За морем телушка  
полушка, да рубль перевоз」<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 安い商品でも、送料が高ければ、結局高いものにつくということ。「海の向こうじゃ二  
束三文でも、ここじゃ馬鹿高い」といった感じか。なおシチェドリンの『僻地の旧習  
Пошехонская старина』にこの諺の入った一節がある――「『……ペテルブルクでもオレン

〈デーニガ／デニガー деньга〉あるいはその指小形〈デーネシカ денежка〉は、「 $\frac{1}{2}$  コペイカ銅貨」のこと。フォンヴィージンの喜劇『旅団長』では、しまり屋の旅団長夫人が息子のイワンに、支払総額を四捨五入したりしない、正確な経費計算方法を教え諭している——「4 コペイカと1 デーネシカ出せばいいところで、5 コペイカも出しちゃいけません Ты тамо не дашь уже пяти копеек, где надобно дать четыре копейки с денежкой」[1幕]。

〈グローシ грош〉は銅貨で、1838 年までは「2 コペイカ玉」、その後は「 $\frac{1}{2}$  コペイカ玉」として流通した。何よりも取るに足らない小額の同義語として使われた。ゴーゴリの『外套』の主人公アカーキー・アカーキエヴィチは、「1 ルーブリ使うたびに、そこから1 グローシを小さな箱へ溜め込んでおくことにしていた (Акакий Акакиевич) имел обыкновение со всякого истрачиваемого рубля откладывать по грошу в небольшой ящичек」。「グローシほどにも評価しない Ни в грош не ставить」は、「相手に敬意を払わない」、「相手を屁とも思わない」という意味の慣用句である。また「グローシの値打ちもない гроша медного не стоит」、つまり「何の価値もない」という意味の慣用句もあるが、要するに「グローシ」は無価値の指標として様々な表現に顔を出すのである。

〈コペイカ копейка〉はいつでも1 ルーブリの百分の一の価値を持つ硬貨であった。

〈セミートカ семитка〉、あるいは〈セミーシニク семишник〉、あるいは〈セマーク семак〉は、一見すると「7 コペイカ硬貨」のようだが、実は「2 コペイカ硬貨」のことである。ではいったいどうして語根に「7 семь」が入っているのだろうか？ それは、相場をそれまでの  $\frac{2}{7}$  に引き下げた 1838 年の改革まで、この硬貨は実際に 7 コペイカだったからである。相場は引き下げ

---

ジとレモンは安いが、暖かい地方じゃただ同然だそうなの……」——『諺の言うことは本当だね。海の向こうじゃ 1 ポルウーシカの牝の子牛も、運ぶとなったら 1 ルーブリかかるってね』 «...В Петербурге апельсины и лимоны дешевы, а в теплых землях совсем нипочем...» — «Правду пословица говорит: за морем телушка полушка, да рубль перевоз.» (13 章「モスクワの親戚。祖父パーヴェル・ボリースィチ」)。

られたが、名称はそのまま使われ続けたというわけである。グレープ・ウスペンスキーの登場人物の一人は、次のように言って相手をなじっている——「おい、学者さんよ、セミートカの正体も知らないってか。セミートカってのはな、2コペイカのことさ А ты, ученый, даже не знаешь, что такое семитка. Знай, это две копейки」[作品名不詳]。

〈アルトイーン алтын〉とは、「3コペイカ硬貨」のことである。オストロフスキーの喜劇『とぼっち В чужом пиру похмелье』に出てくる商人ブルスコフ[の息子アンドレイ]は、こんな気の利いたことを言っている——「ラテン語では2アルトイーン、ロシア語では6コペイカってな По-латыни два алтына, а по-русски шесть копеек」[1幕4場]。思いがけない富をテーマとしたオストロフスキーの別な喜劇は、『1グロシもなかったところに不意に1アルトイーンが舞い込んだ Не было ни гроша, да вдруг алтын』と名づけられている<sup>2</sup>。プーシキンの『大尉の娘』では、マーシャの持参金は、彼女の母親の卓抜な言い回しを借りれば、「目の細かい櫛1本、風呂用枝箒1本、それに(ああ神よ、お許しあれ!)風呂に1回行くためのアルトイーン玉1個 частый гребень, да веник, да алтын денег (прости Бог!), с чем в баню сходить」[3章「要塞」]と書かれている。

「3コペイカ硬貨」はまた〈トルイーンカ трынка〉、〈トリョーシニク трёшник〉とも呼ばれていた。レフ・トルストイの[未完の長編]『デカбристы』にはこう書かれている——「どんな町でもセワストーポリの英雄たちには言葉とともに食事が供され、さらに手や足を失った英雄たちにはトルイーンカが与えられた Во всех городах задавали с речами обеды севастопольским героям и им же, с оторванными руками и ногами, подавали трынки」[1章]。「トリョーシニク」という語には、ネクラソフの詩作品でも出会うことができる——「そのうちに新しい書記にも／慣れてしまった。新し

<sup>2</sup> この題名は諺で、不幸や不運の後で、突然に幸運が舞い込んでくる状況を指して使う。「空の財布に小判が飛び込んだ」という訳もあるが、「柵から牡丹餅」でもいいかもしれない。

い書記ときたら、／トリョーシニクなしには一行たりとも／セミーシニクなしには一語たりとも書きゃしない По времени приладились／И к новому писцу．／Тот ни строки без трешника，／Ни слова без семишника」[『誰にロシアは住みよいか』1部4章「幸せな人々」]。

〈ピャターク пятак〉、あるいは〈ピャタチョーク пятачок〉とは、「5コペイカ硬貨」のことである。同じ価値を持った銀貨もあった。ドゥーニャは、父親の墓の在処を教えてくれた少年に「ピャターク銀貨 пятак серебром」を与えている(プウシキン『駅長』)。

〈グリーヴェンニク гривенник〉とは、「10コペイカ硬貨」のことで、かつて俗語では「グリーヴナ гривна」、「グリーワ грива」とも呼ばれていた。プウシキンの『青銅の騎士』では、ネワの対岸を目指すエヴゲニーの姿がこう描かれている——「暢気な渡し守は彼を／グリーヴェンニク玉1個で喜んで／恐ろしい波の合間を縫って運んで行く И перевозчик беззаботный／Его за гривенник охотно／Чрез волны страшные везет」[第2部]。また同じプウシキンの『ゴリューヒノ村史』の語り手は、彼がカード賭博で大勝ちしたとき、「私のポケットには1ルーブリにグリーワ玉6個しか残っていなかった в то время, как у меня в кармане оставался рубль 6 грив」 と述べている。フォンヴィージンの『旅団長』では、吝嗇な旅団長夫人が、「1日にグリーヴナ玉1個で腹を満たすことができる гривною в день можно быть сыту」[5幕]と請合っている。

〈ピャチアルトイーンヌイー пятиалтынный〉とは、「アルトイーン(3コペイカ)」の5倍、すなわち「15コペイカ硬貨」のことである。ゴーリキーの戯曲『どん底』では、断酒を決意した役者が喜々としてこう伝えている——「ほらここにピャチアルトイーンヌイーが2個。それでも俺はしらふだ Вот они — два пятиалтынных, а я трезв」[3幕]。

〈ドヴウグリーヴェンヌイー двугривенный[ドヴウグリーヴェンニク двугривенник]〉とは、「グリーヴェンニク(10コペイカ)」の2倍、すなわち「20コペイカ硬貨」のことである。画家のチャルトコフは商人から宿命的な老人の肖像

画を「最後に1個残ったドヴウグリーヴェンヌイーで за последний свой двугривенный」購入している(ゴゴリ『肖像画』[第1部])。

〈**ЧЕТОВЕРТАК** четвертак〉は1ルーブリの $\frac{1}{4}$ 、つまり「25コペイカ硬貨」のことである。1917年までは銀貨で流通していた。チェーホフの短編『谷間 В овраге』には、こう書かれている——「農家の女たちは老いも若きも煉瓦を駅へ運んでいって貨車に載せ、その手間賃として1日にЧЕТОВЕРТАК玉を1個ずつもらうのである бабы и девки возят на станцию кирпич и нагружают вагоны и получают за это по четвертаку в день」[9章]。

〈**ПОЛТИНА** полтинник〉、あるいは〈**ПОЛТИНА** полтина〉とは、「50コペイカ硬貨」のことである。これら二つの呼び名は比較的最近まで耳にすることができた。「ПОЛТИНА」はその昔れっきとした公用語で、硬貨の表側に「ПОЛТИНА」と刻印されていた。

〈**ВОШМИГРИВЕННЫЙ** восьмигривенный〉とは、「グリーヴェンニク(10コペイカ)」の8倍、つまり「80コペイカ硬貨」のことである。ロシア製の80コペイカ硬貨はかつて一度も存在したためしがない。こう呼ばれたのは、カフカス地方で流通していたペルシャ製の「4アバース銀貨 серебряная монета в 4 абазы」である。マクシム・マクシーモヴィチはペチョーリンの従僕に「ВОШМИГРИВЕННЫЙ」を1個やる約束をしているが、それは偶然のことではない。なにしろこの出来事の舞台はカフカスだからである[『現代の英雄』2章「マクシム・マクシーモヴィチ」]。

ロシアの基本的な金銭単位である「ルーブリ рубль」には、半公用的な呼び名や俗称がいくつもある。文学の世界でもっとも頻繁に出会うのは、〈**ЦЕЛКОВЫЙ** целковый〉と〈**ЦЕЛКОВИК** целковик〉であるが、これはあらゆる種類の1ルーブリのことではなく、「きっちり целый」1ルーブリ分の価値を持った「1ルーブリ硬貨」のみを指す語である。ゴゴリの『検察官』では、市長がフレスタコーフの従僕オーシブに、「チップとしてЦЕЛКОВИКを2個 пара целковиков на чай」を与えているが[3幕10場]、これはかなり豪勢なチップである！「1ルーブリ銀貨」はしばしば、ただたんに

〈マネータ(硬貨)манета〉、あるいは男性形の〈マネート манет〉と略称されることもあった。トルストイの短編『降格者 Разжалованный』[正確な題名は『カフカスの思い出より。降格者 Из Кавказских воспоминаний. Разжалованный』]では下士官グウシコーフが兵卒にこう言っている——「ほらお前にマネートを10個やるから、酒屋へゆくがいい вот тебе десять монетов, поди к маркитанту」。これは下士官が兵卒に10ルーブリやったということである。「1ルーブリ札」は〈ビレーチク(札)билетик〉と呼ばれた。ドストエフスキーの長篇『罪と罰』には高利貸しの老婆が、「この前は指輪を質草にビレーチク2枚出してやったのに、その指輪ときたら、新品でも宝石商にゆけば1ルーブリ半で買える代物だからね За колечко вам прошлый раз два билетика внесла, а оно и его новое у ювелира за полтора рубля можно」と言って、ラスコーリニコフを非難する場面がある[1部1章]。つまり、老婆は払い過ぎたと考えているのである。

古い「ピョートル1ルーブリ銀貨 петровский рубль」は、ピョートルの頭文字「ペー П」が4つ十字形に刻印されていたので、〈クレストーヴィク(十字硬貨) крестовик〉と呼ばれた。

〈トリョフルブリョーフカ трёхрублёвка〉<sup>3</sup>、〈トリョーシニツァ трёшница〉、〈ピャチートカ пятитка〉、〈ピャチーシニツァ пятишница〉、それに〈ピャチルブリョーフка пятирублевка〉は、読んで字の如しの意味だから、説明は要るまい[前半2語は「3ルーブリ札」、後半3語は「5ルーブリ札」のこと]。「3ルーブリ金貨」は〈チェルヴォーネツ червонец〉と呼ばれた(ここで「純金」を意味する「チェルヴォーンノエ・ゾーロト червонное золото」という表現を思い起こそう)。プウシキンがバラトインスキーにこう書き送っている——「君の作品では詩行という詩行が／チェルヴォーネツさながらに響き、そして輝いている Стих каждый в повести твоей/Звучит и блещет, как червонец」[『バラトインスキーへ К Баратынскому』の冒頭2行。「君の作品」とは『エーダ Эда』のこと]。

<sup>3</sup> ここでは「トリョフルブリョーフカ трёхрублёвка」ではなく、「トリョフルブリョーヴィク трёхрублёвик」となっているが、フェドシュークの勘違いと思われる。後者は「75コペイカ銀貨」(英国レートで3ルーブリに相当した)のことだからである。



〈ゾロトーイ(金貨) золотой〉と〈ポルウイムペリアル(半イムペリアル) полуимпериал〉は解説を要する。オストロフスキーの戯曲『あぶく銭 Бешеные деньги』では、クウチューモフがこう言っている——「とはいえポルウイムペリアル 100 個ぐらいいは手元を取っておこう Все-таки полуимпериалов с сотню наберу у себя」[4幕3場]。この金額は大小どちらなのだろうか？

上述した二つの呼称はともに「5ルーブリ硬貨」を指すものであったが、19世紀末になると「10ルーブリ硬貨」が「ゾロトーイ」と呼ばれるようになった。

概して「10ルーブリ硬貨」は比較的安定した価値を維持していた。「10ルーブリ金貨」は〈イムペリアル империал〉(1897年以降「イムペリアル」は15ルーブリの価値を持つようになった)、〈アラープチク арабчик/арапчик〉、〈ロバーンチク лобанчик〉と呼ばれた。「アラープチク」という語の出自は定かではないが、「イムペリアル」は「イムペラートルスキー(皇帝の) императорский」の意であり、「ロバーンチク」という俗称は、表にブルボン王朝歴代王の一人の頭部が刻印された、10ルーブリ相当のフランス金貨に因んだものである。

オストロフスキーの喜劇『身内同士は後勘定 Свои люди — сочтемся』では商家の奥方が女仲人に、「高貴な生まれの благородного происхождения」花婿を見つけてくれたお礼に、「アラープチクを2個 парочка арабчиков」与えると約束している[1幕7場]。レスコーフの短編『面白い男たち Интересные мужчины』ではカード狂の将校たちが、新参の賭博師を待ちわびながら、こう言っている——「いつも自分たちのロバーンチクを互いの財布から財布へとやったり取ったりばかりしてなきゃいけない法などあるまいよ Что же нам все свои-то лобанчики из кошелька в кошелёк перелобанивать」[5章]。察するに、高額レートのカード賭博が行われていたということである。

〈チェトヴェルトナーヤ четвертная〉と呼ばれていたのは、100の $\frac{1}{4}$ 、すなわち「25ルーブリ札」である。チャーホフの短編『結婚式 Свадьба』では、偽の将軍が結婚式へ参加する謝礼として、チェトヴェルトナーヤを1枚受け取

る手筈になっている<sup>4</sup>。また同じ作家の別の短編『めでたい結末 Хороший конец』では、女仲人がこう口説いている——「わしらの稼ぎですか？ 精進月でなければ、一月働いてチェトヴェルトナーヤ 2 枚になれば御の字というところですか？ Какие наши заработки? Ежели в скоромный месяц заработаешь две четвертных, и слава Богу」。それを聞いた花嫁募集中の車掌長は目を丸くしている——「50 ルーブリだって！ 男だって誰もがみんなそんなに稼ぐとは限りませんよ！ Пятьдесят рублей! Не всякий мужчина на столько получит!」。かくしてこの短編は、車掌長と女仲人自身との結婚で幕を閉じている。

〈ウーゴル угол〉という金銭単位が話題になることは滅多にない。ソバケーヴィチはチチコフと死んだ農奴の売り買いをしているとき、売却代金として「1 ウーゴル」要求している。それに対しチチコフはこう答えている——「つまり 25 ルーブリということですか？ ま、ま、まさかそんなに出せませんよ。ウーゴルの  $\frac{1}{4}$  だって出せませんし、これ以上 1 コペイカたりとも追加はしませんよ То есть двадцать пять рублей? Ни, ни, ни, даже четверти угла не дам, копейки не прибавлю」[1 部 5 章]。

「100 ルーブリ 札 сторублевая ассигнация」は〈ゴスウダールストヴェンナヤ государственная〉と呼ばれた。札には「政府発行紙幣 государственный казначейский билет」と印刷されていた。「100 ルーブリ 札」には、〈カテリーンカ катеринка〉という俗称もあった。エカテリーナ II 世の肖像画が刷り込まれていたからである。確かに「500 ルーブリ 札 пятисотрублевая ассигнация」もまた、同様の上書きがなされていたために、「ゴスウダールストヴェンナヤ」と呼ばれた。故人となった大工ステパン・プロープカについて、「いつも家へツェルコーヴィクを 100 個ずつ持って帰ったのだろうが、もしかしたらゴスウダールストヴェンナヤを 1 枚麻のズボンに縫いこむか、長靴の中

<sup>4</sup> これはフェドシュークの記憶違いと思われる。この話が出てくるのは『結婚式』ではなく、『将軍と結婚式 Свадьба с генералом』である。

に隠していたかもしれない притаскивал всякий раз домой целковиков по сту, а может, и государственную зашивал в холстяные штаны или затыкал в сапог」などとあれこれ詮議しながら、チチコフが念頭に浮かべているのは、まさしくこうした高額の金銭のことに他ならない[1部7章]。この文脈における「ゴスウダールストヴェンナヤ」は、「ツエルコーヴィク(1ルーブリ銀貨)100個」相当の金額ではなく、何かもっと遥かに高額な金銭[すなわち500ルーブリ札]のことである。

## 2 節

### 二種類のレート

#### Два курса

ロシア古典文学を読んでいると、ロシアに長期にわたって存在した金銭の二重価値、すなわち「札 ассигнация」と「銀貨 серебро」による二重価値が惹き起こすトラブルの少なくないことに気づく。〈札 ассигнация〉が初めてロシアに出現したのは、1769年のことである[1843年まで流通]。「札」は次第に、「銀貨」や「銅貨」の流通を圧迫していった。〈銀行券 банковский билет〉もまた「札」と呼ばれた。プーシキンの『スペードの女王』では、カード賭博が「銀行券」で行なわれている。やがて「1ルーブリ札 ассигнационный рубль」は一般的な会計単位となっていた。

札が出回り始めた頃は、「1ルーブリ札」は「1ルーブリ銀貨 серебряный рубль」に等しかった。しかし銀貨で保証し切れない多大な量の札が発行されたために、札のレートが下落し始め、銅貨と札は等価で流通する一方、銀貨の価値は高騰していった。札と銀貨の相対的価値はいつも変動していたが、決済や取引では「1ルーブリ銀貨1枚」を「1ルーブリ札4枚」に換算するのが普通だった。チェルヌィシェフスキーの『何をなすべきか』には次のような一節がある——「当時まだ3ルーブリ札というのがあった。覚えておいでかもしれないが、それは75コペイカ銀貨1枚に相当した Тогда еще были трехрубле-

вые, то есть, если помните, монета в 75 копеек」[2章7節]。

このように2種類の算出法が同時に存在していたために、同じ品物を1ルーブリ銀貨1枚で買うこともできたし、1ルーブリ札4枚でも買うことができたのだった。そのため読者は、『死せる魂』で皆目検討のつかない場面に出くわすことになる。居酒屋の女将がノズドリョーフにウオッカの代金として「ドヴウグリーヴェンニク(20コペイカ)」請求すると、ノズドリョーフは義弟(妹婿)にこう言う——「ポルチャーナ(50コペイカ)払ってやるがいい。それで女将も大満足さ Дай ей полтину, предовольно с нее」。すると「老女将は、『旦那、少々足りませんよ』と言いながらも、喜んで金を受け取ったうえに、急いで駆け出し、彼らのためにドアを開けてやった。彼女は損をしたわけではなかった。彼女が請求したのは、実際のウオッカ代金の4倍だったからである Маловато барин, — сказала старуха, однако ж взяла деньги с благодарностью и еще побежала впотыхах отворять им дверь. Она была не в убытке, потому что запросила вчетверо против того, что стоила водка」という場面である[1部4章]。

いったいどうしたわけで老女将にとっては支払われた50コペイカが請求した20コペイカに比べて「少々不足」であり、またそれにもかかわらず、いったいどうして彼女は支払われた代金に満足しえたのであろうか？

これはつまり、女将の請求したのが銀貨のドヴウグリーヴェンニクだったのに対し、換言すれば、彼女が欲しかったのが札に換算すれば80コペイカだったのに対し(一方商品の売値は札で20コペイカであった)、実際に受け取ったのは札で50コペイカ、つまり売値の4倍とまではゆかなくとも、2倍半の金額だったということである。

公的な商取引はすべて札本位制で行なわれた。チチコフは死んだ農奴を札で買いつけようとしている。県の財政機関である「県税務庁 казенная палата」が彼に認可したのは、札本位の買付だけだったからである。

ここで言うておかなければならないのは、札レートの変動は時代によってのみならず、決済の場所にも、そしてまた換算対象となるのが銅貨か銀貨かとい

うことによっても左右されたということである。ロシア古典文学に例をとるならば、札レートは「1ルーブリ銀貨」に対し、下は「2ルーブリ 90 コペイカ」から上は「4ルーブリ 30 コペイカ」の間で揺れ動いていたことになる。したがってしばしば混乱が生じた。その場合、損をするのは決まってレート換算に暗い人々、経験の不足な人々であった。

オストロフスキーの喜劇『熱き心 Горячее сердце』では手前勝手な商人フルィノフが、自分が働いた破廉恥な行為に対して銀貨で100ルーブリ払うと約束しておきながら、札と銀貨の換算レート3対1を盾に取り、結局は札で罰金300ルーブリを支払っている[4幕1場1景]。

A. B. スウホヴォ=コブイリンの戯曲『訴訟 Дело』では、強請を常習とする役人の手に落ちた地主のムーロムスキーが、要求された賄賂の金額に怖気をふるっている。すべてを札で計算するのに慣れた彼は、銀貨3万ルーブリという総額に度肝を抜かれたのである——「天文学的な数字です——だって札だったら10万ということですからね Силы небесные — да ведь это сто тысяч」[2幕6場]。

やっと1839年になって、札と銀貨の換算レートが「1対3.5」と固定された。1843年頃には札に代わって、銀行で硬貨と交換することのできる政府発行〈兌換紙幣 кредитный билет[кредитная бумажка]〉が導入された。この兌換紙幣は日常的には「クレヂートカ кредитка」と呼ばれた。もっとも人々の多くは、昔ながらの記憶が命じるままに、すでに流通から外れていた「札 ассигнация」という呼称を使い続けた。オストロフスキーの登場人物たちはしばしば、「兌換紙幣」のことを「札」と呼んでいる。

### 3 節

#### 虹の七色

#### Все цвета радуги

日常的に「紙幣 бумажные деньги」はその色で呼ばれることがしばしばで

あった。そこで「謎解き」が必要となる。

〈黄札(ジョールテニカヤ)жёлтенья〉とは、「1ルーブリ札」のことである。「アンネニカは財布から黄札を3枚抜き出し、老いた召使たちに分け与えた Анненька вынула из портмоне три жёлтенские бумажки, раздала старым слугам」(サルティコフ=シチェドリン『ゴロヴリョーフ家の人々』[4章「姪」])。「黄札」はしばしばふざけて〈カナリア канарейка〉とも呼ばれた。この小鳥の体色が黄色であることに因んでの呼称である。

〈緑札(ゼリョーネニカヤ)зелененькая〉とは、「3ルーブリ札」のことである。ムーロフは息子の養育費として「緑札」を1枚出しているが(オストロフスキー『罪なき罪人たち Без вины виноватые』)、「緑札」とは3ルーブリ札のことだとすれば、この金持の吝嗇ぶりが分かるというものである。ドストエフスキーの『罪と罰』には、「役人はカテリーナ・イワーノヴナに緑色の3ルーブリ紙幣を1枚渡した чиновник дал Катерине Ивановне трехрублевую зелененькую кредитку」とある[5部5章]。

〈青札(シーネニカヤ)синенькая〉とは、「5ルーブリ札」のことである。チコフはコロボチカに、「銀貨ではなく、すべて青札で и не серебром, а все синими ассигнациями」と言って、15ルーブリの支払をすべて札で済ますことを約束している[1部3章]。レフ・トルストイの短編『ポリクウシカ Поликушка』の主人公は、「ある農夫が医者へ青札を1枚支払い、それで自由の身となった как доктору синенькую мужик дал и тем уволился」、つまり徴兵を免れたときの顛末を物語っている[8章]。青札はときに〈四十雀(シニーツァ) синица〉、あるいは〈シニューハ/シニューガ синюха/синюга〉と俗称されることもあった。ゴーゴリの『ソロチンツィの定期市』では、ジプシーが若いグリーツィコにこう言っている——「ほら手付に四十雀1枚やるよ Вот тебе и синица в задаток」[5章]。

〈赤札(クラスネニカヤ)красенькая〉とは、「10ルーブリ札」のことである。トルストイの『復活』ではカチューシャ・マースロワが裁判官にこう説明している——「二人の目の前で赤札を4枚取りました При них взяла четыре

красненьких」。そのとき検察官は公用語に翻訳し、「40 ルーブリ」と言い直している[1部11章]。「赤札」はしばしば「風疹(クラスヌーハ)краснуха」と呼ばれもしたし、あるいは茹でたザリガニの色との連想で「ザリガニ(ラク)рак」と呼ばれることさえあった。ドストエフスキーの『死の家の記録』では囚人の一人が、「ザリガニ 100[10×100=1000 ルーブリ]でも承服しないね За сто раков не соглашусь」と言い放っている<sup>5</sup>。

〈白札(ベーレニカヤ)беленькая〉とは、「25 ルーブリ札」のことである。「[この百姓たちの絵と]風景画で白札1枚ぼつきり[Вот за этих мужичков и] за ландшаптик возьму беленькую」——これはゴーゴリの『肖像画』に出てくる画商の台詞である[1部]。

〈虹札(ラドウジナヤ)радужная〉とは、「100 ルーブリ札」のことである。フョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフは、「自宅の庭の泥の中に虹札を3枚 на собственном дворе, в грязи, три радужных бумажки」落としている。スメルヂャコフはその3枚を拾って届け出るが、その褒美として10 ルーブリもらっている[1部3編6章「スメルヂャコフ」]。

〈灰札(セーレニカヤ)серенькая〉とは、「200 ルーブリ札」のことである。ゲルツェンの『過去と思索』では、賄賂として200 ルーブリ札1枚受け取った書記官が、破廉恥にもこう言い放っている——「実際この灰札はね、他の請願人たちに見えるようにしたほうがいいのさ。連中だって、私は200 ルーブリを袖の下に入れはしたが、その代わり仕事もきっちりこなしたということを知ったら、大いに勇気づけられるだろうからな Ну, серенькая, тем лучше, пусть другие просители видят, это их поощрит, когда они узнают, что двести

<sup>5</sup> フェドシュークは『死の家の記録』中のフレーズとして引用しているが、実際は『シベリア・ノート Сибирская тетрадь』にあるフレーズである。アカデミー版30巻全集の第4巻によれば、引用されたフレーズは『シベリア・ノート』の273番に収録されており、そこではさらに「何ならいま試しにザリガニ100枚積んでみな。本当に俺は承服しないから Вот сейчас, на пробу, сто раков давай, право, не соглашусь」と続いている。また273番には注もつけられている(Ф. М. Достоевский. Полное собрание сочинений в 30 томах. Т. 4. Изд. «Наука», 1972, стр. 242, 319.)

рублей я взял, да зато дело обделал」[4部26章「ペテルブルク」1節「警告」]。

ここまでくれば、レスコーフの短編『魅せられた旅人 Очарованный странник』の主人公が銭勘定しながら、次のような瑞々しい描写を口にするとき、彼が念頭に思い浮かべていることを見抜くのはたやすことだろう——「青い四十雀[5ルーブリ札]に灰色の鴨[200ルーブリ札]、それに赤い雷鳥[10ルーブリ札]もいる——いないのは白い白鳥[25ルーブリ札]だけだ Синие синицы и серые утицы и красные косачи — только одних белых лебедей нет」[13章]。ただひとつだけ、「雷鳥 косач」とは野生の「雄黒雷鳥 тетерев-самец」の呼称だということは説明しておこう。鳥に喩えられた紙幣の呼称の響き——そのほとんど詩的とも言える響きの美しさについてはいかなる贅言も要すまい！

参照する際の利便性を考え、ここに一覧表を提示しておくとしよう。

	色彩による札の俗称	札の価値
1	黄札(желтенькая)	1ルーブリ
2	緑札(зелененькая)	3ルーブリ
3	青札(синенькая)	5ルーブリ
4	赤札(красненькая)	10ルーブリ
5	白札(беленькая)	25ルーブリ
6	虹札(радужная)	100ルーブリ
7	灰札(серенькая)	200ルーブリ

#### 4 節

#### 有価証券

#### Ценные бумаги

19世紀において資本主義的な関係が発展するとともに、硬貨や紙幣とならんで次第に、「預金券 депозитка」や「国債 серия」、「銀行券 билет」(つまり各種民間銀行の債券 облигация частных банков)、「質札 ломбардный билет」、「株券 акция」、「手形 вексель」といった〈有価証券 ценные бумаги〉の流通



が盛んになってゆく。こうした有価証券を「現金 чистые деньги」に換算するのは、教養の低い人々には非常な難儀であった。オストロフスキーの喜劇『罪なき罪人たち Без вины виноватые』では無学な娘シェラーヴィナがこう言っている——「株券と銀行券を手に入れたわ。ためつすがめつしては目の前においてみたけれど、いったいこれがどれだけのお金になるのか、私には一生かかっても数え切れないでしょうね Достались мне акции да билеты; вот я поверчу, поверчу их перед глазами, да опять положу; а сколько тут денег, ни в жизнь мне не счесть」[1幕3場]。

国家は、保有貴金属によって国庫を補填しようと、〈預金券 депозитный билет〉を導入した。銀行に金銀を預けた人々に対し、預けた金銀を担保に「預金券 депозиты」を、つまり金銭同様に流通する「預り証 сохранный расписка」を交付したのである。この他、切り取り式クーポン付き〈国債 серия〉もまた同様に流通し、何の支障もなく銀と交換されたが、これは所有者に多少の利子をもたらした。

スチーフ・オブロンスキーが森を売却したとき、読者が目にするのは「ポケットを国債で膨れ上がらせた с оттопыренным карманом серий」彼の姿である(レフ・トルストイ『アンナ・カレーニナ』[2編17章])。チャーホフの短編『職なし Без места』では法学士ペレピョールキンが、職を得るために、役人に賄賂として預金券をそっと渡そうとしているが、結局はそれが功を奏するという結末になっている。

貴族が没落するとともにますます繁盛したのは、「貸付業 ссудно-залоговая операция」である。「融資金庫 ссудная касса」(一般に〈質屋 ломбард〉と呼ばれた)では、農奴や土地、あるいはその他の不動産を抵当に、年間数パーセントの利子つきで一定の金額を借りることができた。返却不能の場合は、抵当物件が貸付金返済に充当され、貸付機関の所有物となった。プーシキンの例を思い出していただきたい。オネーギンの父親は、「息子の話が分からず／領地をしきりに抵当に入れていた понять его не мог/И земли отдавал в залог」[『エヴゲニー・オネーギン』1章7連]ではなかったか？ 資産を抵当に入れたこ

とを証明する書類は、〈**抵当証文 закладная**〉と呼ばれた。「まもなく抵当証文に決められた利子を払わなければならない Скоро проценты по закладной платить」——この不安に彩られたフレーズは、ロシア古典文学に登場する貴族たちがしばしば口にするものである。貸付金をすべて使い果たしてしまったら、貸付金の返済を迫られないように、さらにまた金策を講じなければならないというわけである。

『死せる魂』におけるチチコフのインチキ商売は、抵当としての農奴と関連している。チチコフのインチキ商売については、章を改めて詳述することしよう。

質屋は抵当として資産を受け取ったのみならず、運用に資するための出資金もまた預かった。出資金の運用によって生まれる利益(普通は年率5パーセント)の一部は、出資者へ配当された。配当金なしの場合もあったが、その場合は「富札 выигрышный билет」が配当された。〈**質札 ломбардный билет**〉は通常のコインと変わるところなく流通した。サルティコフ＝シチェドリンの『ゴロヴリョーフ家の人々』では、アリーナ・ペトロヴナが年率5パーセント利子付質札を数えているのに対し[2章「肉親らしく」]、その息子のイウドウシカは次のようなことを夢見ているのである——「質札をたくさん買い集め、それを安全な場所に仕舞い込み、利子をたんまり稼ぐとしよう。何の苦労も心配もなく、クーポン1枚切り取れば、それで小金が転がり込むという寸法さ！ Накуплю я себе билетов, положу в верное место и стану пользоваться процентами: ни заботушки мне, ни горюшка, отрезал купончик — пожалуйста, денежки!」[6章「滅びの人」]。

ここで説明しておかなくてはならないのは、「利子付質札 процентный ломбардный билет」には(切り取り式の)〈**クーポン купон**〉が印刷されており、所有者はそのクーポンを提示することによって利子を受け取っていたということである。そしてこのクーポンは、たとえ好まれなかったとはいえ、通常のコイン同様に支払手段として通用したのだった。レフ・トルストイの短編『偽クーポン Фальшивый купон』には、ギムナジウム生ミーチャがクーポンに印

刷された2ルーブリ50コペイカという数字の前に数字の1を書き加え、それを12ルーブリ50コペイカで売り捌く様子が描かれている[1部2-3章]<sup>6</sup>。クーポンは手渡しで流通したが、やがて偽クーポンが出回り始め、多くの不幸と犯罪の元凶となった。

ロシア古典文学の世界においてクーポンや質札よりももっと頻繁に出会うのは、〈手形 **вексель**〉という言葉である。手形とはいったいどんなものであるか？ 手形とは、公的に保証された、特定の紋章入り債務証書のことで、それは資産を抵当に借入れた負債を定められた期限までに、原則的に利子付で償還することを請合うものである。もしも債務者に償還能力なしと判明した場合には、債権者(あるいは複数の債権者)の同意に基づいて負債完済の期限が延長されることもあれば、あるいは債権者側が負債総額の全額償還ではなく、負債総額の一部と一定の利子の償還に甘んじることもあった。債権者側が期限延長にも、負債の部分的償還にも同意しない場合は、問題は裁判所に持ち込まれた。裁判所は償還能力のない債務者の資産を差し押さえ、その目録を作成したうえで売却し、その売却代金によって未払い手形を賠償したのだった。

手形は、通常のコイン同様、支払に用いられた。プーシキンの中編『スペードの女王』にはチェカリンスキーのことが語られているが、彼は「勝ち分は手形でもらい、負け分は現金で支払うことで **выигрывая векселя и проигрывая чистые деньги**」数百万ルーブリ溜め込んだのだった[6章]。ここで話題になっているのはカード賭博のことである。手形の価値は現金のそれよりも、当然のことながら低く見積もられた。手形は全額支払われるという保証がないからである。チェカリンスキーのような機転の利く狡猾な人々は、この事実をフ

<sup>6</sup> フェドシュークの説明はやや不正確である。ミーチャは直接的には何もしていないからである。金に困ったミーチャにクーポンの偽造を教え、実際に数字の1を書き込むのは同じギムナジウム生のマーヒンだからである。そしてその偽造クーポンを持って写真屋へ行き、1ルーブリ20コペイカの額縁を買い求め、釣銭として11ルーブリ30コペイカ——その内訳は「1ルーブリ札10枚、ドヴュグリーヴェンヌィー(20コペイカ)玉6枚、ピャターク(5コペイカ)玉2枚 **десять рублей бумажкой и, .. шесть двугривенных и два пятака**」——受け取るのもまたマーヒンである。

ルに利用した。チェカリンスキーは、たとえば額面 100 ルーブリの手形を 10 ルーブリ札相当で引き受け、その手形で 100 ルーブリ全額ではなくとも、せめても 50 ルーブリは手に入れていたということである。ドストエフスキーの長編『カラマーゾフの兄弟』のグルウーシェニカもまたフョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフと共同で、同じ商売に手を染めている——彼女は「1 ルーブリにつき 10 コペイカというような二束三文の値で手形を買い叩き、そうした手形のあるものについては 10 コペイカにつき 1 ルーブリもの利鞘を稼いだ скупкою векселей за бесценок, по гривеннику за рубль, а потом приобрела на иных из этих векселей по рублю на гривенник」[3 部 7 編 3 章「一個の玉葱」]。

チェーホフの短編『大問題 Задача』に出てくる青年サーシャは、銀行で手形を一枚受け取ると、そこに父方の伯父である裕福な陸軍大佐の偽造サインを書き込み、まんまと 1500 ルーブリもの大金を手に入れる。やがて銀行で偽造が発覚し(償還期限が切れていたのだ)、青年はいまにも裁判にかけられそうになる。裁判から逃れる手段はただ一つ、引き出した全額を期限内に銀行へ払い込むことである。家名に泥を塗ってはならずと家族が一丸となって対処するが、その後[親族一同で手形の金を工面することになり、事態がうまく收拾されそうになると]この厚かましい青年は、拒否したら裁判所へ行って、家名を傷つけるぞと脅して、母方の伯父から 100 ルーブリせびり取ろうとするのである。

不実な連中はときおり、金に困っている人々の朴訥さと無知につけこんで、彼らに借入金額の書き込まれていない手形にサインすることを強要した。そうすることによってサインされた手形には、実際の借入総額以上のどんな金額でも書き込めてしまうのだった。そうした状況を目の当たりにできるのは、オストロフスキーの戯曲『過酷な日々 Тяжелые дни』、それに『狼と羊 Волки и овцы』においてである。

「手形」という語と結びついたある種の言い回しには、一定の説明が必要である。そうした言い回しはロシア古典文学にしばしば登場するからである。たとえば〈手形を割り引く учесть вексель〉という表現であるが、これは手形

を銀行に預け、それを担保に償還期限まで、銀行の利益となるように割引率分を差し引いた金額を借り受けるという意味である。〈**手形の決済期限を越す просрочить вексель**〉とは、期限までに手形の額面金額を支払えないという意味である。〈**手形の不渡りを宣告する опротестовать вексель**〉とは、手形の額面金額の支払不能を公的に確定するという意味であり、この場合には手形の所有者に負債取立に関するある種の特典が与えられることになった。〈**手形の取立を申し立てる предъявить вексель ко взысканию**〉とは、手形の額面に従って金銭を要求するという意味である。〈**手形を割り引く дисконтировать**〉という動詞は、「手形を割り引く учесть вексель」という言い回しと同意である。

オストロフスキーの喜劇『身内同士は後勘定』(最初の題名は『破産者 Банкрот』)における策略の意味は、こういうことである。手元にある手形の支払を低く抑えることで懐を肥やそうと目論む商人のポリショーフは、自己破産を宣言する。そして彼は、裁判所が未払い手形の内金として資産を取り立てることのできないように、前もって自分の資産を娘婿で手代のポドハリュージン名義に変更してしまう。この事件の審理中、ポリショーフは債務監獄、俗に言うところの〈**穴蔵 яма**〉へ投獄される。だが債権者たちは、ポリショーフに対する貸付金について1ルーブリにつき10コペイカ受け取ることを肯んぜず、一方娘婿はと言えば、あたかも「親族として」かりそめに義父の資金や大小様々な店を切り盛りしているかのような顔をして、債権者たちがポリショーフの「穴蔵」からの即時釈放と引き換えに要求する1ルーブリにつき25コペイカの支払を斥けてしまう。裏切られ、零落したポリショーフにはシベリア流刑の恐怖が刻一刻と迫りくる。「身内同士」の後勘定はこんな次第だったわけだが、これはつまり、狡猾な若い娘婿が老獪な義父を手玉にとったということである。

偽造サインした手形を使つての詐欺商法というのは、オストロフスキーのもう一つの喜劇『狼と羊』の筋立てにも大いに関与している。

ロシアにおいて資本主義が発達するに連れて、金銭とその代替証書の意義は益々増大していった。どんな犠牲を払おうとも、もしも必要なら危険を冒して

までも、とにかく金持になりたいという欲求は、ロシア文学の多くの作品にその影を落としている。レールモントフの『仮面舞踏会』に登場するネイズヴェスヌイーの次の台詞は、この情熱のまたとなく見事な定義となっている[4幕1場8景]――

私は、銭金が地上の王であると知り、  
その前に額ずいたのだ。

Я увидал, что деньги — царь земли,  
И поклонился им.

登場人物同士の金銭的な関係は、ロシア古典作家の作品中において重要な位置を占めている。とはいえ、そうした諸関係に秘められた意味が時間という厚い帳によって、法律や生活条件の根本的な変化によって、読者から覆い隠されていることもまたしばしばである。登場人物の心理により深く分け入り、彼らの行動の原因やそこに描かれる衝突の本質をより深く理解するためには、どうしてもこの帳を開け放たなければならないのである。